

資料館見学の手引き

砂川の桑苗

立川市歴史民俗資料館

〒190-0013 立川市富士見町3-12-34

042-525-0860

2006年7月改訂

■養蚕と桑苗

江戸時代の中頃から養蚕技術は急速に発達し、明治時代には生糸が対外輸出品の上位を占めるようになりました。養蚕農家は、少しでもマユを多く生産するため、色々と知恵を絞りました。良質な桑の葉を求めたのもその一例でした。桑の葉の質は蚕の成育に大きく左右し、良い桑の葉は蚕の食いつきも良く、マユも多く収穫できました。



桑苗の出荷（高松町・大正時代）

■砂川の桑苗

多摩地域は、かつて桑苗の一大産地でした。なかでも、砂川村は大正時代には桑苗の生産量が全国一だったこともあり、桑苗の特産地として特に有名でした。江戸時代の享保年間（1716～1736）には、すでに桑の産地として知られており、早くから桑苗の生産が行われていたことがわかります。



宮内省への桑苗納入記念（大正11年）



トラックで桑苗を出荷（上砂町・昭和36年）



砂川にひろがる桑畑（上砂町・昭和54年）

■桑苗の品種

一般に、養蚕には「葉が大きく肉厚な桑がよい」とされています。このような桑は、蚕の食いつきが良いだけでなく、給桑（蚕に桑を与えること）作業も楽になるため、養蚕農家にとっても有利でした。桑苗の生産が盛んに行われていた砂川村では江戸時代のころには、「白庄

土」^{ど まる は じゅうもん じ}「丸葉十文字」などの品種がすでにあつたと伝えられています。

幕末・明治時代に接木による生産が確立されると、生産作業が簡略化し、大量生産が可能となりました。接木法は品種改良にも適しており、毎年のように新しい品種が生みだされました。

